

中国・ネパール両国からエベレストに登頂成功の 野口 健^{けん}さんを迎え

植村直己冒険賞授賞式・記念講演会 「富士山から日本を変える」



2007年5月15日、エベレストに中国側から登頂に成功して喜ぶ野口さん（写真中央）ら登頂メンバー



盾と記念メダルを受取り、笑顔で記念撮影に応じる野口さんと中貝市長

6月7日、日高文化体育館に 2007「植村直己冒険賞」受賞者の野口 健さん(34歳・東京都在住)を迎え、12回目となる授賞式を開催しました。

野口さんは、2007年5月15日、中国側からのエベレスト登頂に成功しました。エベレストには、1999年にネパール側からの登頂に成功していることから、両国からの登頂に成功したのは日本人で8人目となりました。さらに野口さんは7大陸の最高峰すべてに登頂した経歴を持つとともに、清掃登山活動にも積極的に取り組んでいます。

当日、河合雅雄選考委員の選考評に引き続き、中貝市長から盾とメダルを受け取ると、野口さんは、「植村直己さんの名を冠した賞を受けることができ、感激。今後、植村さんの名を汚さないように頑張りたい」と受賞の喜びを約1,100人の観衆を前に話しました。

また「富士山から日本を変える」と題した記念講演も行われ、これまでの冒険などさまざまな活動の足跡を映像を使って紹介したあと、今後、目指すべきものについての話をユーモアを交えながら、生き生きと話していました。

授賞式終了後には、植村直己さんの出身地区の国府地区公民館に会場を移し「受賞者を囲む会」が開催されました。地元有志や植村直己さんの同級生など約100人が、心のこもった手料理で野口さんをもてなし、授賞式では聞くことができなかった話や植村直己さんの思い出話などで大いに盛り上がりました。

《問合せ》植村直己冒険館 ☎44 - 1515

植村直己との出会い
高校生のある日、先輩と言いつけ、気が付くと先輩の顔を殴つていて、この事件が原因で1カ月間の自宅謹慎処分を受けることになった。そのとき父に「自宅にいるよりも出かける」と後押しされ、大阪を歩いていたら、偶然、植村さんが書いた単行本「青春を山に賭けて」を見つけた。植村直己という名を見て、「大冒険をしたすごい人」というイメージを持っていたのだが、



記念講演会でジョークを交えながら語る野口さん

講演要旨 富士山から日本を変える



オープニングでは、府中小学校の児童が植村直己をテーマにした演目を上演した

本を読むうちにその壮大な世界に引き込まれ、感銘を受けると同時に「普通の人」であることが分かり身近に感じた。ちょうど、植村さんが大雪山岳部についていけず落ちこぼれた状態が、自宅謹慎処分を受けた自分と境遇が重なったようにも感じた。それからがむしろに山の世界に入り込んでいった。

クレバスに落ちる

7大陸最高峰登頂を目指し、マツキンリー(アメリカ)に挑戦しているとき、クレバスに落ちてしまった経験がある。

数人のグループだと例え転落しても仲間を引き上げてもらえるが、単独行では誰も助けてくれない。マツキンリー特有のホワイトアウトと呼ばれる濃い霧が立ち込める中を進むうち急に足が軽くなりクレバスに落ちたことがはじめて分かった。「死にたくない」との思いから何とか抜け出した。その後、帰国することを考えたが、日本を出発する際、一人だと死にいくようなものだ」と先輩に言われたことを思い出し悔しくて、もう少し頑張ってみよう」と決意し登頂した。

途中、死んで凍りついた鳥を見つけて、山の大きさから比べると自分の存在なんてちっぽけなものなんだと感じた。このとき、これまでであった悩みやこだわりがすべて消えて

いった。

エベレストへの挑戦

エベレストの8、000メートル以上の世界は、死の風が吹いているように感じた。頂上までは行けると思ったが、無事に下山できるかどうかの自信がなく、登頂を断念して下山する決断をした、グループ内のもう一人は頂上を目指すと云って霧の中を出発したものの、結局断念して、ベースキャンプに戻ってきたときには、指の凍傷がひどく、切断せざるを得ない状態であった。あの場面で私が撤退を決断したことは結果的に正しい判断だと確信した。

それから1998年10月に、過去2度エベレスト登頂に失敗して日本に帰ってきたとき、周辺から「また失敗しましたね」と言われたが、果たして成功と失敗とは何をもって判断するのか分からない。撤退はしたものの、無事に生きて帰ってきたことが成功であったと確信している。

エベレストへの3度目の挑戦では、高山病に悩まされた。標高8、600メートルを超えた辺りから突然、体が動かなくなり、頭が痛くなっていった。ここで、初めて高山病であることに気づき、遭難してしまうと感じた。山頂までもう少しであったことからそのまま頂上に向かった。登頂に成功したものの、頂上に到着し

たときには「ヤッター」という達成感よりも「来てしまったよ。早く帰ろう」と思った。山は本当に怖い場所であり、久しぶりにギリギリの世界を痛感した。

たかさんの人から寄付をいただいでやらせていただいているというブルッシュャーを感じる中、3度目にして登頂に成功できたときは、うれしいという気持ちより、これでやっとお世話になった人に恩返しができたと思うとともに、エベレスト登頂はこれで終わりにしようと考えた。

しかし、登頂成功から半年後には再度、エベレストに向かう理由を探している自分があることに気付いた。

清掃登山活動の出発点

1999年にエベレスト登頂成功し、7大陸最高峰に最年少で登頂成功したのを良い機会に、「もう山の世界を引退しよう」と思った。ところが、周りの方から「次にどのようない冒険をするのか」との質問攻めにあうことになった。このときふつと頭によみがえったのは、エベレストベースキャンプに放置してあったゴミのことであった。このとき、とつさに「来年からエベレストの清掃を行います」と口走ってしまった。

以前、海外の登山隊に「日本人はトマヤを第2の富士山にするのか」と言われたことを思い出した。私は、

富士山は世界で最もきれいな山だと思っていたのだが、その人に富士山のことを「世界で一番汚い山」と言われ、ショックを受けた。

清掃登山での死

現地での清掃登山は思った以上につらいものだった。シエルパを雇って荷物の運搬をしてもらったが、過酷な条件の中でシエルパを死に追いやってしまった。このときにも、もうやめようと考えた。

しかし、亡くなったシエルパは生前、子どもたちに「このまま清掃を続けると、お前たちが大きくなったときにネパールはきれいになっていくよ。エベレストからネパール全体をきれいにしよう」とうれしそうに語っていたことを聞いた。「この活動は継続しなければならぬ」と思うとともに遺族のためにシエルパ基金を設けることにした。

これからの活動

清掃登山以外にさまざまな活動に取り組んでいる。「あきらめればそこで終わってしまいます」。今後は、植村直己の名に恥じないような活動を行っていききたい。



エベレスト清掃登山で回収された酸素ボンベの山